羅生門

楠山正雄

青空文庫

一

頼光が大江山の鬼を退治してから、これはその後のお話です。

こんどは京都の羅生門に毎晩鬼が出るというわさが立ちました。なんでも通りかかるものをつかまえては食べるという評判でした。

春の雨のしとしと降る晩のことでした。平井保昌と四天王が頼光のお屋敷に集まって、お酒を飲んでいました。みんないろいろおもしろい話をしているうちに、ふと保昌が、

「このごろ羅生門に鬼が出るそうだ。」

といい出しました。すると貞光も、

「おれもそんなうわさをきいた。」

といいました。

「それはほんとうか。」

と季武と公時が目を丸くしました。綱は一人笑って、

「ばかな。鬼は大江山で退治てしまったばかりだ。そんなにいくつも鬼が出てたまるものか。」

といいました。貞光はやっきとなって、

「じゃあ、ほんとうに出たらどうする。」

とせめかけました。

「何ひと、出たらおれが退治てやるまでさ。」

と綱はへいきな顔をしていいました。貞光と季武と公時はいっしょになって、

「よし、きさまこれからすぐ退治に行け。」

といいました。

保昌はにやにや笑っていました。

綱は、その時

「よしよし、行くとも。」

というなり、さっそく鎧を着たり、兜をかぶったり、太刀をはいたり、ずんずん支度をはじめました。

綱も、外の三人もみんなお酒に酔っていました。

貞光は、その時あざ笑いながら、

「おい、ただ行ったって、何かしようこがなければわからないぞ。」

といいました。綱は、

「じゃあ、これを羅生門の前に立ててくる。」

といって、大きな高札を抱えて、馬に乗って出かけました。

真っ暗な中を雨にぬれながら、綱は羅生門の前に来ました。そして門の前を行ったり戻ったり、しばらくの間鬼の出てくるのを待っていました。けれどいつまでたっても、鬼らしいものは出て来ませんでした。綱はひとりで笑って、

「はッは、鬼め、こわくなったかな。やはり鬼が出るというのはうそなのだろう。まあ、せっかく来たものだから、高札だけでも立てて帰ろう。」

と独り言をいいながら、門の前に高札を立てました。

「やれやれ、つまらない目にあった。」

綱はぶつぶついいながら、そのまま帰って行こうとしました。あいにく雨が強くなって、風が出てきました。真っ暗な中で綱は、しきりに馬を急がせました。

ふと綱の乗っていた馬がぶるぶると身ぶるいをしました。そのとたん、ずしんと何か重たいものが、後ろの鞍の上に落ちたように思

いました。おやと思って、綱がそっとふり向くと、なんだかざらざらした堅いものが顔にさわりました。それといっしょにいきなり後ろから襟首をつとつかまれました。

「とうとう出た。」

綱はこう思って、襟首を押さえられたまま鬼の腕をつかまえて、

「ふん、きさまが羅生門の鬼か。」

といいました。

「うん、おれは愛宕山の茨木童子だ。毎晩ここへ出て人をとるのだ。」

と、鬼はいうなり綱の襟首をもって空の上に引き上げました。引き上げられながら綱はあわてず刀を抜いて、横なぐりに鬼の腕を切りはらいました。その時くらやみの中で「ううん。」とうなる声がしました。そのとたん綱はどさりと羅生門の屋根の上に落とされました。

その時はるかな黒雲の中で、

「腕は七日の間預けておくぞ。」

と鬼はいって、逃げて行きました。

綱はそろそろ屋根をおりて、その時までもしっかり襟首をつかんでいた鬼の腕を引きはなして、それを持って、みんなのお酒を飲んでいる所へ帰って行きました。

帰って来ると、みんなは待ちかまえていて、綱をとりまきました。そして明かりの下へ集まって鬼の腕をみました。腕は赤さびのした鉄のように堅くって、銀のような毛が一面にはえていました。

みんなは綱の武勇をほめて、また新しくお酒を飲みはじめました。

二

「七日の間腕を預けておくぞ。」

こういい残した鬼の言葉を綱は忘れずにいました。それで万一取り返されない用心に、綱は腕を丈夫な箱の中に入れて、門の外に、

「ものいみ」

と書いて張り出して、ぴったり門を閉めて、お経をよんでいました。

六日の間は何事もありませんでした。七日めの夕方にことことと門をたたくものがありました。綱の家来が門のすきまからのぞいてみますと、白髪のおばあさんが、杖をついて、笠をもって、門の外に立っていました。家来が、

「あなたはどなたです。」

と聞きますと、おばあさんは、

「綱のおばが、摂津の国渡辺からわざわざたずねて来ました。」

といいました。

家来は　気の毒そうに、

「それはあいにくでございました。主人はものいみでございまして、今晩一晩立つまでは、どなたにもお会いになりません。」

といいました。するとおばあさんは悲しそうな声で、

「綱は小さい時母に別れたので、母親の代わりにわたしがあの子を育ててやったのです。それが今はえらい侍になったといって、せっかく遠方からたずねて来ても会ってはくれない。このごろはめっきり年をとって、こんどまた会おうといっても、それまで生きていられるかおぼつかない。ああ、ざんねんなことだ。」

といいながら、とぼとぼ帰って行こうとしました。

綱は奥でおばさんのいうことをすっかり聞いていました。聞いているうちに気の毒になって、どうしても門を開けてやらずにはいられないような気がしました。それで自分が出て行って、門を開けてやって、

「よくいらっしゃいました。」

といって、奥へ通しました。

おばさんはうれしそうに入って来て、久し振りのあいさつがすむと、

「さっき、ものいみで門をあけないといったが、あれはどういうわけなのだね。」

と聞きました。

綱は鬼のことをくわしく話しました。おばさんはだんだんひざを乗り出しながら聞いていましたが、

「まあ、不思議なこともあるものだね。だがわたしの育てた子がそんなえらい手柄をしたかと思うと、わたしまでうれしいとおもうよ。ついでにその鬼の腕というのを見たいものだね。」

といいました。

綱は気の毒そうな顔をして、鬼のいい残した言葉があるので、今日七日のものいみが明けるまでは、だれにも見せることができないというわけを、ていねいにいって断りました。するとおばさんは悲しそうな顔をして、

「まあ、よくよく縁がないのだね。なにしろ年を取って生い先の短い体だからね。しかたがない、あきらめましょう。」

と、しおれ返っていました。

その様子をみると、綱はまたどうしても鬼の腕を出して見せなければならないような気になって、

「ではせっかくだから、ちょっとお目にかけましょう。」

といって、箱をおばさんの前に持ち出して、ふたをあけました。

「どれ、どれ。」

とおばさんはいって、つとそばによりました。そしてしばらくじっと箱の中をのぞき込みながら、

「まあ、これが鬼の腕かい。」

といって、いきなり左の腕を伸ばして、腕を取りました。

綱がはっと思う間に、おばさんはみるみる鬼の姿になって、空に飛び上がりました。そして綱が刀を取って追いかけるひまに、破風をけ破って、はるかの雲の中に逃げて行きました。

綱はくやしがって、いつまでも空をにらめつけていました。でも鬼はそれなりもうふっつりと姿を現しませんでした。都の中でも鬼のうわさはぱったり止みました。

青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社
　　1983（昭和58）年6月10日第1刷発行
※「家来は　気の毒そうに」の空白と、「おばあさん」「おばさん」の混用は底本のままです。
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
2003年9月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

羅生門

楠山正雄

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/